

September 30 Incident and A Family of Indonesian Leftist**KITAMURA Yumi**

This section introduces the interview of Mr. Chan Chug Tak, the son of a Chinese Indonesian political leader during the Sukarno period, Siauw Giok Tjhan. Mr. Chan left Indonesia on September 23, 1965, a week before the September 30 Incident to pursue his higher education in Beijing. After the September 30 Incident, his father was arrested the entire family went through the hardship. In case of Mr. Chan, he was exposed to the wave of Cultural Revolution till eventually found his way out to Hong Kong. By reading the life history of Mr. Chan, one can obtain a deeper insight to the political change in both Indonesia and China during the Cold War period.

9・30事件と インドネシア左派知識人の家族

北村 由美

1 はじめに

本稿は、2013年10月31日と2015年11月1日に香港で行ったチャン・チュンタク (Chan Chung Tak: 陳仲德) さんへのインタビューを元になっている。これらのインタビューは、香港での共同調査の過程で行われ、2013年には、芹澤知広、片岡樹、中谷潤子、横田祥子、北村が、2015年には、芹澤、中谷、北村が同席した。インタビューは主にインドネシア語で行われた。

チャンさんは、1945年5月に、スカルノ時代のインドネシア華人の代表的なリーダーの一人であった、シャウ・ギョクチャン (Siauw Giok Tjhan: 蕭玉燦) の長男として生を受けた¹⁾。シャウ夫妻には、7人の子女がいたが、1965年の9・30事件の後、シャウが逮捕されたことにより、シャウ一家の人生は、大きく変化することになる。

チャンさんと次姉は、シャウの逮捕の時期、中華人民共和国にいた。その後チャンさんは香港へ、次姉は、シャウが1975年に釈放された後に、持病のあった父の治療を助けるためオランダへと移住し、2014年にインドネシアへ帰国した。チャンさんと次姉に先だって、北京の高校と大学に進学した長姉は、事件当初はインドネシアに帰国していたが、その後再び北京へと移住した。チャンさんの二人の弟は父の逮捕後に、国を後にした。一人はオーストラリアの親族を頼って移住し、もう一人は、香港に逃げた後、海南島 (Hainan Dao) の華僑農園で働き、後に北京にいた長姉・次姉を頼って中国本土に移動するが、最終的には次姉を手伝うためにオランダに渡り、次姉が帰国した後も同地で鍼灸クリニックを続けている。

チャンさんのインタビュー内容を紹介する前に、チャンさん一家が中華人民共和国、香港、オランダ、オーストラリアへと離散するきっかけとなった、父であるシャウ・ギョクチャンの政治活動について簡単にまとめておきたい。

シャウ・ギョクチャンは、1914年にスラバヤで生まれ、主にオランダ語で教育を受けた。シャウは、18歳以降、政治とジャーナリズムという二つの世界で活動続けた。インドネシア華人民党 (PTI) に入党し、同党の設立者であるリム・クンヒエン (Liem Koen Hian) が編集長をしていたスラバヤのマレー語日刊紙、Sin Tit Po (新直報) の記者としての仕事をはじめ、勢力的に活動範囲を広げていく。

第二次世界大戦の後の独立戦争期、アミール・シャリフディン政権 (1947年－1948年) において、国務大臣を務める。そして1949年に独立戦争が終了した後、シャウは、政治とジャーナリズムの双方においてますます存在感を高める。

ジャーナリズムに関しては、1951年に *Suara Rakyat* をはじめとする新聞や雑誌を刊行する。*Suara Rakyat* は、後にインドネシア共産党機関誌となる *Harian Rakyat* の前身である。一方で、政治活動としては、華人のインドネシア国籍の取得と、インドネシア社会への統合を推進するバブルキ (Badan Permusjawaratan Kewarganegaraan Indonesia: BAPERKI、インドネシア国籍協商会) を1954年に設立した。このバブルキは、スカルノ期のインドネシアにおいて最も大きな華人組織に成長した。特に教育の分野における活動が顕著で、1960年にはレスブブリカ大学を設立するにいたった。スカルノ時代のインドネシアにおける唯一の民主的な選挙となった1955年選挙の際、バブルキは国会において1議席を獲得し、シャウが議員となった。

1965年の9・30事件の後、代表的な左派知識人の一人であったシャウは逮捕され、バブルキは解体した。1965年に解体される時点で、バブルキの会員総数は華人以外にも含めて約30万人に達していたとされる。

シャウが逮捕されたことにより、シャウの子弟のうち次女、そしてチャンさんは留学先であった中国からの帰国を見合わせた。次男は、取るものも取りあえず船で出航し香港を経由して、海南島の華人農園で仕事を得た。そして下の兄弟は親戚を頼ってオーストラリアに移住した。シャウ自身は1975年に釈放された後、3年の自宅監禁期間を経て、1978年に治療のためにオランダの次女を頼って、夫婦でオランダに移住し、1981年にオランダで亡くなった。

2 インドネシアでの青少年時代

子供の頃の記憶といえば学校のことだろうか、とチャンさんは話をはじめた。

1958年以降、インドネシア国籍の華人の子弟が中国系の学校に通うことを禁じられた²⁾。この状況を受けて、バプルキは華人団体の Chung Hua Chiao Toan Chung Hui (Chao Chung) と協力し、インドネシア国籍の華人子弟向けの学校を設立した。その結果、華人子弟の多くは、バプルキが運営していた学校に通うことになり、チャンさんによると40%近くの生徒が転校した。チャンさん自身も、振強小学を卒業した後、バプルキが運営するパサル・バル中学校に通った。パサル・バル中学は、新華中学という中国籍の華人向けの華語学校の裏に校舎があった。チャンさんの次姉は、華語学校である巴城中学を卒業した後、やはりバプルキが運営していた高校に入学していた。

チャンさんの幼少期、父のシャウ・ギョクチャンは大臣をつとめていたが、当時は大臣でさえ自転車通勤をしていたような時代で、何も特別なことはなかったという。チャンさんは、シャウが、馬車で大統領官邸に通勤をしようとしたこともあるが、馬は糞をするので、官邸内には入れなかったといったのんびりとした雰囲気が伝わるエピソードも紹介してくれた。

チャンさんは比較的早い時期から政治に関心を持っており、1960年頃には、バプルキの青年部に相当する IPPI (Ikatan Permusyawaratan Pemuda Indonesia) に加わり、デモに参加するようになった。

政治に興味を持ったきっかけとしては、父の影響よりもインドネシア共産党の元書記長タン・リンジエ (Tan Ling Djie: 陳令如) の影響が強かった。チャンさんの幼少期から青年期にかけて、シャウ家には、タン・リンジエが居候をしていた³⁾。タンは、書記長時代にとった路線である「タン・リンジエ・イズム (Tan Ling Djie-ism)」について、1951年から書記長になったアイディットによって批判され失脚し、1953年に党本部を追われる⁴⁾。独身であったタンは、1965年9・30事件で逮捕されるまでの約15年間、シャウ宅に身を寄せた。

「タン・リンジエ・イズム」についてチャンさんは、「『タン・リンジエ・イズム』は、議会主義だ。議会主義を推進したことによって、タンはアイディットによって批判されたが、よくよく注意してみると、アイディット自身も議会政治を追求していた。タンと家で話していて分かったことだ」と述べていた。

チャンさんにとって、この時期のインドネシア政治と華人をめぐる状況を理解することは、タンの思い出と不可分であるようだった。

タンは、左派知識人が必ずしも共産党員として公に活動する必要はないと考

えていたのに対して、アイディットの方針は、大衆政党として共産党を確立し、共産党支持者が党員として公明正大に活動するべきであるという方針であった。1963年頃、バブルキの幹部の一人でジャカルタ地方議会議員であったリム・クンセン(Liem Koen Seng)が共産党に入った際は、タンは、「なんで公開しなきゃいけないんだ」と激怒していた。スカルノが標榜するNASAKOM⁵⁾によって、バブルキが「NASAKOM化」し、共産党員であることを公開するメンバーができたのかもしれないとチャンさんは述べた。チャンさんによると、NASAKOMのそれぞれの要素を代表する華人がおり、NAS(ナショナリズム)ならインドネシア党のウィ・チュタット(Oei Tjoe Tat)、A(宗教)なら著名なキリスト教徒であったヤップ・ティアムヒエン(Yap Thiam Hien)がいた。

3 中国への留学と文化大革命

チャンさんはパサール・バルの高校を卒業した後、1964年にレスプブリカ大学に入学し、機械工学を専攻していたが、1965年の9・30事件のちょうど一週間前、9月23日に留学のために北京に渡航する。北京では、外語学院に入学したが、チャンさんの場合はインドネシアの華語学校で中国語の基礎を修得していたため、同級生より上級クラスに入るようになった。1965年12月に、清華大学に入学する方法がないか模索したところ、同大学の先生から直々に数学の試験を受けることになり、試験の結果入学できることになった。1月から授業に参加したが、ベトナム人留学生が大半で、他に北朝鮮、アルジェリア、インドネシア華人の学生がいた。このころ、9・30事件と10月にレスプブリカ大学が焼き討ちにあった事件について聞き、北京で勉強できて幸運だと感じていた。ところが、この年の6月に文化大革命がはじまり、大学の授業は事実上停止し、学生らは「大字報」という壁新聞作りに駆り出された。

1966年の9月、10月には、帰国するか学校に残るかの選択をすることになった。15人の学友たちと同時に留学したが、その後10人はインドネシアへ帰国し、チャンさんを含め、5人が残った。その後は、中国在住のインドネシア華人としてまとめられ、江西省の南昌(Nanchang)に下放された。南昌では、五七干校に入れられ、農民になるための再教育を受けた。インドネシア華人らは、同じ場所に住み、農業の知識がある中国人の指導のもと田畑を耕したり、豚や山羊を育てたり

した。これらの作業のうち、チャンさんは、山に山羊を連れて行くのが好きだったという。南昌の同じグループにいたインドネシア華人の多くは独身男性で、家族連れや女性は少なかった。チャンさんは、3、4年南昌で過ごした後、山東省の煙台(Yantai)にて漁船整備の仕事を得る。400トン級の漁船に乗船し、機械を調整する仕事だった。もともと機械工学を専攻していたチャンさんにとっては願ってもない職だったが、船酔いになれることができず、3年ぐらいたった1975年に肺炎にかかり入院することになった。

4 9・30事件と家族の動向

家族でチャンさんと同時期に中国にいたのは、やはり留学中だった次姉だった。長姉は、1958年に学校の再編があった際に、インドネシアの高校ではなく、北京の高校に進学し、1964年には大学を卒業し、帰国した。帰国後は新華中学で化学を教えていたが、1966年に同中学が閉鎖されインドネシアでの生活に耐えられず中国に戻った。現在オランダにいる弟の場合は、マレーシア対決の軍事演習のため、9月30日当日までハリム空港⁶⁾にいた。その後9・30事件がおこり、(父が逮捕された後に)弟も捜されたが、約1年間身を隠した後、1966年に中国に渡航し、海南の華僑農場で仕事をしていた。

5 香港への移動

5.1. 移動の経緯

退院直後、香港より父の友人が会いにきたため、北京に行った。30代に入っても満足な仕事がなく独身で、病気で痩せ細っていたチャンさんを見て、父の友人は「香港に行って運命を変えてはどうか」という助言をする。その際にシャウ・ティオンジン(Siauw Tiong Tjing: 蕭忠清)という名前では、すべてを清めてしまい手元に残らないという意味なので、改名をし広東語でチュンタク(仲徳)としてはどうかという助言もしてくれた。

姓に関しては、父がブル島(Buru Island)⁷⁾に送られるという話を耳にしたことから、ジャカルタに一人でいる母を助けるために帰国しようとし、母の姓に換えることにした。実際には、アメリカのカーター大統領がスハルト大統領に対して

政治犯の保釈を求めたため、父はブル島には送られず、刑務所から保釈され自宅監禁となったため、チャンさんは帰国することはなかった。その後、父は(当時外相だった)アダム・マリク(Adam Malik)との個人的関係を通して治療のための出国を許される。北京にいた次姉が両親を助けることになり、1978年にオランダへと移住した。

香港に向かうにあたってチャンさんは、北京から広州まで列車にのり、そこから深圳(Shenzhen)に向かった。深圳の羅湖(Lo Wu)から、香港へ入る橋を渡った。インドネシアの中学時代からの友人がすでに香港におり、その友人が紅磡駅に来てくれた。

両親はチャンさんがインドネシア帰国に備えて香港に移ったことを知っていたが、チャンさんの身の安全のため、帰国を禁じた。その背景には、9・30事件以降、(左派華人系の大学だということ目をつけられていた)レスプブリカ大学の学生の行動が問題化した際には、国外にいるチャンさんが責任者であることにするように父が学生に命じていたため、(当局が)何度もチャンさんを捜して家に来ていたという事情があった。

帰国しないことが決まり、チャンさんは香港で腰を据えて仕事をし、家庭を築こうと決心した。それ以前は、節約のため友人の本屋の倉庫に住みながら、本屋を手伝っていたが、自動車修理工場でバイクのファンを修理する仕事をはじめた。子供のころから機械の分解や修理が好きだったチャンさんには、こちらの仕事の方があっていたが、住居は本屋の倉庫から工場の倉庫に移っただけで、結婚できる気がしなかった。幸いにも、香港の父の友人が現在の妻を紹介してくれ、結婚にいたった。

5.2. 結婚と仕事

妻はインドネシア生まれの華人だが、1960年に姉とともに中国に帰国し、北京で中学を卒業した。1972年に香港に移動し、香港廣東省銀行(The Kwangtung Provincial Bank)で仕事をしていた。香港廣東省銀行は後に中国銀行と合併する。妻の父も、香港の中国銀行で働いていたが、結婚前に亡くなっていた。紹介された当時、妻も30歳を過ぎており、素朴な人柄が気に入り、結婚することになった。チャンさんの住まいが倉庫という問題があったが、妻が中国銀行の職員であったため、社宅に移れることになった。家の問題が解決し、1980年に結婚した。

1981年には、中国銀行でコンピュータ導入がはじまって技師の公募があり、チャンさんも中国銀行に転職する。チャンさんは、中国銀行のコンピュータ技師として昇進を重ね、ハードウェア・メンテナンス部門のマネージャーになった。中国銀行は、1997年に香港が返還された際、香港上海銀行(The Hongkong and Shanghai Banking Corporation Limited: HSBC)などが縮小する一方で、拡大路線をとったが、1997年のアジア経済危機を受け、勤続15年以上の社員の昇給がなくなる。結局2000年には縮小を余儀なくされ、13の関連銀行が一つになり、再編に対応するためにチャンさんのハードウェア部門は多忙を極めた。様々な混乱もあり、思うところあって、2003年に退職した。子供は35歳の長男と32歳の長女(いずれも2015年インタビュー時)の二人である。長男は、当初オーストラリアで修士課程に進んだが、2004年香港に帰国し、仕事をしながら、香港の大学で電子工学の修士課程を終えた。長女はすでに結婚している。

5.3. 住居と引越し

結婚後最初に住んだ杜宅は、長沙灣(Cheung Shawan)にあった。1983年までここに住み、荃湾の緑楊新村に家を買う。荃湾にはインドネシア華人が多く住んでいた。隣家もやはりインドネシア華人の家庭で、子供が一人いた。奥さんが専業主婦だったので、子供の面倒をみてもらえて助かった。他にも、ピアノを教えている華人の友人が近所におり、長女はその友人のもとでピアノをならっていた。二人目の子供が生まれた後、1989年に、銅鑼湾(Causeway Bay)に引越しをした。その後、退職した際に油塘(Yau Tong)に引越した。現在は、妻の足腰が弱くなってきたので、油塘の家を貸して、上り下りの少ない場所に移った。

5.4. 永住権

1971年以降、帰国華僑の移動がはじまる。1972年には相当数の帰国華僑が香港に脱出しようとしたため、香港で永住権を得るのが難しくなる。香港に移動したチャンさんの妻は、すぐに永住権を得ることができたが、1976年に移動したチャンさんは、7年居住した後に永住権を得られた。

5.5. 香港のインドネシア華人組織

香港には、多数のインドネシア華人組織があるが、チャンさんは個人的にそれ

ほど組織活動に興味がないという。母校である新華中学の同窓会には一回参加したが、それっきりである。ただし、1999年にインドネシア華人の知人らと創立した香港印尼研究学社 (Hong Kong Society for Indonesian Studies: HK SIS) では、会長を務めた。今でも時々顔をだすが、最近はおっぱらインターネットで活動しており、*Gelora45.com*というサイトで、中国語とインドネシア語で発信している。

香港印尼研究学社を創立したのは、1998年にインドネシアでおこった、華人に対する暴行やレイプや、商店が破壊された暴動に対する、インドネシア政府の対応への不満からだった。1998年の暴動の際、インドネシア政府は全く対処せず、海外から反華人的だと見られた。中国政府もインドネシア政府に対して、インドネシア国籍の華人の保護を訴えることはなかったことから研究社を創立することになった。*Indonesia Focus*という雑誌を刊行し、インドネシアを離れ、インドネシアにも中国にも所屬しない人たちの問題を取り上げている。98年には、華人を含め、すべての国民が保護されることをインドネシア政府に求め抗議デモを、香港のインドネシア領事館で行った。その際には、民主建港協推聯盟 (Democratic Alliance for the Betterment and Progress of Hong Kong: DAB) や、僑友社などのメンバーなどからかなりの人数が参加した。

6 インドネシアと中国への思い

6.1. インドネシア訪問と父の思い出

1987年に、チャンさんははじめてインドネシアに帰国した。帰国時に逮捕されることを恐れていたが、香港のパスポートで名前も変わっており、インドネシアでの滞在先も妻の姉の家だったため、全く問題なかった。インドネシアには家族4人で10日間滞在し、ジャカルタ以外にソロとジョグジャカルタを訪問した。ソロには当時兄弟がいたが、1998年の暴動で焼き討ちに遭い、子供たちの留学先であったオーストラリアに移住してしまった。1980年代は、まだ母がオランダで存命であったため、機会があればインドネシアではなくオランダを訪問するようにしていた。父に最後に会ったのは、1981年の10月5日だった。父は10月1日に北京に招待された後、10月5日に香港に寄り、チャンさんの長男の誕生日をともに祝った。父は、1981年にライデン大学に講演に行く途中で急死した。もう少し健康を気遣える環境にいれば、もっと長生きしたのではないかと思っ

ている。

6.2. 現在の中国とインドネシアへの思い

現在の中国への思いをきいたところ、チャンさんは主に政治的な現状分析を踏まえた意見を述べてくれた。中国に関しては、体制に問題があるとはいえ、希望があるという回答であり、インドネシアに関しては、1998年にインドネシアが民主化された後、華人をめぐる法的な枠組みは大幅に改善したと考えているが、ジャカルタのグロドック(Glodok)の華人商店がSNI(Standar Nasional Indonesia)がない商品売っているという理由で閉店におこまれるなど、対華人差別は残っていると考えている。

また、今年(2015年)は9・30事件50周年だが、政府側の対応について、具体例を挙げて批判していた。一つ目は、9・30事件の被害者の子息が、スウェーデンから帰国し、父のお墓参りに行ったところ警察に逮捕された事件。二つ目は、サラティガのサティア・ワチャナ大学で出版された雑誌 *Lentera* の9・30事件の特集号が発禁になったこと。そして三つ目としては、チャンさんと弟が10月28日の若者の日にあわせて出版を企画しようとしている父の9・30事件に関する書き物の許可がおりていないことを挙げ、9・30事件に対する現政権への批判点を説明してくれた。

ジョコ・ウィドド現インドネシア政権が9・30事件の被害者に謝罪をするかどうかという問題をめぐって、自身も9・30事件の被害者家族であるチャンさんは、強く思うところがあることが伝わってきた。

7 おわりに

本稿では、インドネシアにおける左派華人知識人の代表的な人物である、シャウ・ギョクチャンの長男であるチャンさんの語りを紹介した。本章の語りからは、父が逮捕され、家族が離散する中で、チャンさんがどのように自らの生活を開拓していったかが詳細に分かる。このようなインドネシア→中国→香港の移動の経緯と、詳細については、次節とあわせて読むことで更に具体的なイメージを形成することができるだろう。

一方で、チャンさん個人の語りの大きな特徴は、中国への進学というともすれ

ば中国へのナショナリズムに由来すると説明されがちな選択肢と、インドネシアへの強いナショナリズムが矛盾無く共存している点である。シャウ・ギョクチャンの家族であることや、シャウ家に長らく滞在していたタン・リンジエの影響下で形成されたチャンさんの政治信念は、父の逮捕後の過酷な経験を経た後、今日までインドネシア・ナショナリズムの信奉から揺らぐことはなかったようだ。

本稿の記録は、このようなチャンさんの個人の記録としても、シャウ・ギョクチャンというインドネシア華人知識人の代表的知識人の家族の記録の片鱗としても重要な記録であるといえる。

注釈

- 1) シャウ・ギョクチャンの経歴については、主に *Southeast Asian Personalities of Chinese Descent: A Biographical Dictionary* の Siau-w Giok Tjhan の項目、並びに 貞好 [2016] を参考にした [Suryadinata ed. 2012: 970–973; 貞好 2016: 146–152]。
- 2) スマトラ島における地方反乱に際して台湾政府が武器を供与したという理由で、1958 年以降、インドネシアは台湾との正式な国交を断絶したため、台湾系の学校が閉鎖された。
- 3) タン・リンジエは、インドネシア共産党のトップクラスまでのほりつめた、数少ない華人であった。1948 年 1 月にオランダとシャリフディン内閣の間で結ばれたレンビル停戦協定への不満から、インドネシア共和国内の内部対立が先鋭化していたが、同年 9 月には、インドネシア共産党が東ジャワマディウン市で武装蜂起し、国軍に鎮圧されるマディウン事件が起こった。マディウン事件では、戦死したムソ (Musso) をはじめ、共産党指導部の多くが失われた。タンは、マディウン事件を生き延びた数少ない共産党指導部メンバーであり、党の再生を目指した。アイディットの登場により、タン・リンジエの方針 (タン・リンジエ・イズム) は、インドネシア国内よりも国外からの意見に影響を受けていると批判を受けた。タンと友人であったシャウは、1953 年に共産党機関誌 *Harian Rakyat* の編集者を辞退した [McVey 1968: 357–361]。
- 4) 「タン・リンジエ・イズム」への共産党内での批判については、以下が参考になる。Partai Komunis Indonesia. 1954. “Tentang Tan Ling Djie-isme,” *Bintang Merah*. Tahun ke-IX, 1954, 2-3, Februari/Maret. Kongres Nasional Ke-V. Jakarta: Yayasan Pembaruan. <https://www.marxists.org/indonesia/indones/KongresPKIke5/TentangTanLingDjie.htm> (2016 年 8 月 25 日閲覧)
- 5) 1959 年以降、スカルノが「指導される民主主義」体制として大統領権限を大幅に強め、

事実上権威主義体制に移行した後の政治スローガン。NAS (Nationalisme: 民族主義)、A (Agama: 宗教)、KOM (Kommunisme: 共産主義)の三大勢力の協力を謳っている。

- 6) ハリム・ベルダナクスマ空港。1985年にスカルノ・ハッタ国際空港が開港するまでジャカルタの国際空港として使用されていた。
- 7) ブル島とは、マルク諸島に位置する島の一つで、9・30事件で逮捕された人々をはじめ、スハルト体制期に多くの政治犯が隔離された。

参考文献

〈日本語〉

貞好康志. 2016. 『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』松本: 木犀社.

〈英語〉

Coppel, Charles A. 2012. Siauwi Giok Tjhan. In *Southeast Asian Personalities of Chinese Descent: A Biographical Dictionary*, edited by Suryadinata, Leo, pp. 970-973. Singapore: ISEAS.

McVey, Ruth. 1968. Indonesian Communism and China. In *China's Policies in Asia and America's Alternatives vol.2*, edited by Tan Tsou, pp. 357-394. Chicago: University of Chicago Press.

Partai Komunis Indonesia. 1954. Tentang Tan Ling Djie-isme. *Bintang Merah*. Tahun ke-IX, 1954, 2-3, Februari/Maret. Kongres Nasional Ke-V. Jakarta: Yayasan Pembaruan. <https://www.marxists.org/indonesia/indones/KongresPKIke5/TentangTanLingDjie.htm> (2016年8月25日閲覧).